

不安と冒険と体験

この間、仕事が終わって、私の好きなドラマのDVDを借りにレンタルショップに行きました。私はいつも同じ道を通ってレンタルショップに行っています。よく行くところなら、私はいつも同じ道を通ります。その方が安心でしょう。しかし、「今回はいつもと違う道を歩いてみよう」と思いました。レンタルショップを出て、いつも左に曲がって家に帰るのですが、今回は右。決心を変える前に、さっさと右に曲がって知らない道を歩き始めました。

いきなり、全く知らない風景に囲まれていました。左側にあるラーメン屋さん、右側にある花屋さん、私をじっと見ているおじいさん、全てが新しく、ワクワクしました。一足ごとに周りのビルや人などで無我夢中になっていきました。歩きながら、私は道を頭の中で覚えるようにしていました。小さい頃から高校を卒業するまで、ボーイスカウトの活動でキャンプなどの体験が沢山あり、方向音痴ではない方だと思います。しかし、あつという間にどこにいるか分からなくなってしまいました。「携帯電話の地図機能を使おう」ととっさに思ってポケットに手を入れ、検索しようとした。しかし、指先が携帯電話を触った瞬間に頭の中の声が言いました。「いや、ちょっと待ってよ。これはちょっとした冒険じゃないか。携帯電話を使わずに、帰ってみよう」頭の中の記憶に従い、そこをぐるりと踵を返して、出発した所へ引きかえし始めました。

「そうだったんだね。左側にあるラーメン屋さん、右側にある花屋さん、きつこの道を通ってきた」と落ち着いてきました。

約20分後、レンタルショップに戻ることができました。深呼吸をして、いつもの道を通り、家に向かいました。そして、ちょっとだけ笑顔になりました。

この話の教訓は、「不幸中の幸い」ということです。つまり、私は道に迷ってしまいましたが、新しい発見もでき、とてもよい経験でした。たまに起こる悪いことは事実上は怖く見えるだけで、実は良い機会かもしれません。

今の先端技術の時代には、悪いことなどがあつたら携帯電話などを利用する事が多くなってきました。パソコンや携帯電話を使い、自分で考えずにインターネットなどで解決方法を探すことで、早く答えを得ることが出来ます。気持ちの不安は確かに消えますが、これは本当に良いことでしょうか？私は道を迷った時に携帯電話を使えば最も早く帰れる道が分かり、15分以内に帰ることが出来たかもしれません。しかし40分ぐらいかかってしまい、不安な気持ちも結構ありましたが、携帯電話を使わず家に帰るためには、自分で考える必要があつたので、ちょっとの冒険になりました。これは、きつと良い経験だったと思います。

Uncertainty, Adventure and Experience

A little while ago, after work, I went to the video store to rent a DVD of one of my favorite shows. When I go to the video store, I always take the same way. Actually, when I go anywhere that I go to regularly, I always take the same way to get there. It just feels right, you know?

Well, this time was going to be different. "This time I'll take a different way home!" I thought. So, I left the video store, and instead of turning left like I always do, this time I turned right. I quickly took my first steps in that direction, so as not to give myself enough time to have a change of heart. All of a sudden, I was encircled by a totally unfamiliar scene. The ramen shop on my left, the flower shop on my right, the old man staring at me from down the street; everything was new and exciting! One step at a time, I walked further and further into this new place, all the while keeping the streets that I was taking like a map in the back of my head. Starting when I was in elementary school and all throughout high school, I was a boy scout, eventually earning my Eagle. So, I consider myself to be pretty good with directions. However, I soon realized something very alarming. I had no idea where I was. The first thing that I thought was, "Whatever, I'll just use the map function on my phone." And I reached into my pocket to grab it. But no sooner had I touched my phone, then the voice in my head spoke up, "Hang on a second. This is kind of a mini adventure, isn't it? Let's try to get back home without using the phone, shall we?" So, remembering the path that I took to get to where I was, I turned on the spot and began to retrace my steps. "That's right," I thought, "there's the ramen shop, and the flower shop from before." After about 20 minutes, I was back at the video store. I took a deep breath, and then turned left to take the usual way back home, smiling the whole way.

So what's the point of this story? Well, to put it shortly, there's always a silver lining. Even though I got lost, I got to experience a new place and discover new things. At first it seemed bad, but it actually turned out to be a really nice experience. In this day and age, people grab their phones as soon as it seems like something bad is going to happen. Cell phones and the internet make it so easy to just look up the solution to a problem quickly without having to think about it at all. But is this really a good thing, all the time? If I had used my phone when I got lost, I probably could have gotten home in about 15 minutes. Instead, it took 40. Yes, I felt out of my comfort zone, but not using my phone required me to think for myself and in the process, the whole experience became kind of an adventure. Sometimes, putting down the phone is the right decision.



アラレちゃん
だより♪

くぼた みおな
窪田 湊夏ちゃん(1歳)西原在



手作りオモチャに
ニッコリ笑顔(*^^*)

みやぎ さねと
宮城 貴登ちゃん(0歳)港川在



お腹すいたよ～
(^o^)!!

いけはら りよ
池原 理葉ちゃん(0歳)大平在

「てだっ子STUDIO」写真募集

●日頃の子どもの写真を郵送または画像データをメールで毎月月末までに送付してください。

窓口へ直接提出も可。集合写真は不可。

※被写体の子どもの氏名(ふりがな)・年齢(0か月,1歳など)・居住地区(安波茶・伊祖など)一言コメントの記入を忘れずに!

〒901-2501 浦添市安波茶1-1-1

浦添市役所 国際交流課

☎876-1234(内線2613・2614)

E-mail:kokusai@city.urasoe.lg.jp

ハイサイ こちら市長室！

「スロープがつなぐもの」

伊祖地域から浦添運動公園内の陸上競技場に向かうには国道330号線(通称バイパス)下のトンネルを抜ける方法があります。

その急な階段の一部が今年、車イス対応スロープに変わっていることにお気づきでしょうか？

伊祖地域にお住まいの車イス生活の方は、目の前に運動公園がありながらこれまで40段余りもある急な階段のために、大きく迂回をしなければ目的地に辿り着けませんでした。

特に陸上競技場をメイン会場として使用する「ただこまつり」などの大きなイベントでは周辺で交通規制も行われるため、さらに大変でした。

この伊祖地域に暮らす車イスのMさんは小さな頃からこの不便を市に訴えてきました。

しかし現実的には、勾

配があまりにも急であつたために距離の長いスロープが必要となり、設計や工事も簡単ではなく、改修費用も決して安くはありませんでした。

それでも関係する担当者や頭をひねりながら頑張った結果として、待望のスロープがやっと完成したのでした。

そして、十年以上の歳月を経て、ようやく彼女の願い「車イスでも一人で運動公園へ行くこと」が実現したのでした。完成を喜ぶ彼女がお礼に市役所を訪れた時の担当者

の「これまでたくさん橋や道路を造ってきたけど、こんなに喜んでもらったのは初めて」という言葉が印象的でした。

ところが、スロープが完成してみると利用していたのは車イスのMさんだけではありませんでした。車イス利用者だけでなく、それを押す介護者の人たちが、杖をついた

高齢者、ベビーカーを押すパパやママ、ちよちよ歩きの子どもの手を引きお腹の大きな妊婦さんなど、多くの人がスロープを利用していたのです。



障がいはいは決して「人」や「身体」にあるのではなく、私たちの「社会」や「心」の中に存在しています。「街」だけでなく「心」のバリアフリーがこの街で完成する未来を夢見て、一つひとつ改善に取り組んでいます。

問い合わせ 秘書課
☎876-11234
(内線2563)



浦添市長
松本 哲治

文化課発信



第9回

～浦添大公園内に立つ不思議な石「仲間あさと原の印部石」～

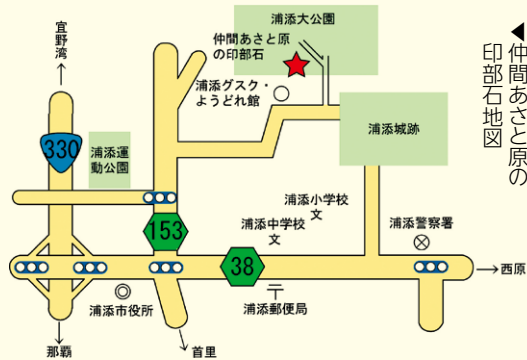
「…と原 ス」と刻まれた石が仲間の浦添大公園内にひっそり建っています。これは印部石(通称ハル石)と呼ばれる石で、市内でただ一つ現地に残っているものです。印部石は今でいう測量基準点で、ひらがなやカタカナのいろは文字と原名(今でいう小字)が片面に彫刻されているのが特徴です。この印部石には、「あさと原」という原名が刻まれていることが周辺に落ちていた破片を合わせたことで分かっていて(写真参照)、「ス」という大きな「いろは文字」も刻まれています。

また印部石を安定させるため、その周りを根張石で囲った印部土手という土台も作られています。印部石を使った測量技術は、フランスの測量技術を習得した中国の測量官から学び、それを琉球時代にアレンジしたものとして推測されます。この印部石は、田畑、山林等の状態を調べ、その土地ごとの収穫量を出すための測量を行うことを目的として設置されました。測量は王府の三司官であった蔡温(さいおん)の命令で行われ、その際、測量基準点として印部石を各所に設置しました。その数は約1万基あったとされていますが、残念ながら、現在確認されている印部石は約200基、浦添市内では教育委員会や自治会、個人等が保管しているものが10基ほどあります。

ぜひ一度、現地でご覧になってみてはいかがでしょうか？



仲間あさと原の印部石



仲間あさと原の印部石地図

問い合わせ 文化課 内線6214・6217